

自分の為、国のために学びたい子どもたちがいる

～カンボジアの教育のいま



かとう けいこ

(株)まちづくり観光デザインセンター代表取締役
 (一社)北海道開発技術センター参事
 北海道大学大学院農学院共生基盤学専攻博士課程(D3)在籍。

主な公職は、JAF社員、アイヌ文化ツーリズム検討委員会座長、アドベンチャートラベル推進会議委員、北海道競馬運営委員など。

カンボジアという国に対して、過去の長きにわたる内戦の記憶から、紛争や地雷など負のイメージを持つ人も多いかもしれません。カンボジアはインドシナ半島の中心に位置し、タイ、ベトナム、ラオスと国境を接し、平均年齢が若く労働力が豊富で政治が安定しています。外国からの投資の受け入れ体制が良いです。国際協力機構(JICA)をはじめとする日本の関係機関も深く関与しており、親日的な感情を持つカンボジア人も多いことから、今後は人的な交流の充実にも期待できます。

日本に渡航するカンボジア人は2008年が2,701人、2018年は21,696人。2018年のカンボジアから日本への渡航者は、10年前の約8倍で、ASEAN諸国の中でも突出した伸び率となっています。しかし、北海道との接点及び交流の実感はベトナムやタイに比べると薄いという実情もあります。今回は2020年2月に岡山、鹿児島、千葉、東京の仲間と共にカンボジアとベトナム(ホーチミン)に、「教育と日本とのビジネスでの協働の可能性」をテーマに調査しました。2回にわたり報告します。

◆ カンボジアの歴史

1867年にフランスの植民地となり、第2次世界大戦後はフランスの保護下に戻りました。その後1953年に独立、完全独立に尽力したシハヌークは父のノロドム・スラマリットに王位を譲り、自身は首相に就任しました。その後、1960年代になると隣国ベトナムの戦争の影響もあり政情が不安定になりました。1970年の親米

カンボジア基本情報

面積	18万1035km ² (日本の約50%)
人口	約1,500万人(年齢中央値は約22歳と非常に若い)
首都	プノンペン
元首	ノロドム・シハモニ国王(Norodom Sihamoni)
首相	フン・セン(Hun Sen)
政体	立憲君主制
民族構成	クメール人90%。ほかにチャム族、ベトナム人など20以上の民族が10%
宗教	クメール人の大半が仏教徒(上座部仏教)。そのほかイスラム教(ほとんどのチャム族)、カトリックなど
言語	公用語はクメール語。観光関係機関では英語、フランス語なども通じる。
過去5年平均GDP成長率	7.2%(2018年)

派ロン・ノル將軍のクーデター（クメール共和国の樹立）に始まるカンボジア内戦とその後の軍事政権（クメール・ルージュ）により、大混乱の時代が続きました。ロン・ノル政権時代、相次ぐ米軍の爆撃で農村のインフラは破壊され、農業生産は著しく低下しました。

1975年から1979年のクメール・ルージュによるポル・ポト政権下では、中国の毛沢東主義を奉じた極端な農本主義を採りましたが、もともと内戦で破壊されていた農地に強制移住させられた都市住民による非効率な農作業の結果、飢餓やマラリアが蔓延し大量の餓死者を出しました。また思想改造の名目により、大量の都市の富裕層・知識層が軍の一部に虐殺されました。

80年代に入るとベトナム軍が断続的に内戦に介入し、親ベトナム派のカンプチア人民共和国が樹立され、反ベトナムのポル・ポト派などと内戦状態が続きました。1991年になってカンボジア和平パリ協定が開かれ、国際連合カンボジア暫定統治機構（UNTAC）の設置、クメール・ルージュ非合法化・武装解除、内戦の終結、難民の帰還、制憲議会選挙の実施などを定めた合意文書が調印されました。93年に、UNTACの管理下で制憲議会選挙が実施され、制憲議会において立憲君主制を定めた憲法が採択されました。新たに発布された新憲法にもとづきシハヌークが国王に再即位し、制憲議会は国民議会となって、カンボジア王国がおよそ23年ぶりに復活しました。

◆ カンボジアの教育の歴史

カンボジアは70年代にポル・ポト政権における内戦により、多くの知識人が殺害されました。ポル・ポトは原始共産主義社会を目指し、「知識は人々に格差をもたらす。無知で貧乏で純粋な農民が最も改造しやすい」という理由から教育を受けている者（教員、医師、技術者、学者等）を中心に200～300万人への迫害を繰り返しました。教員は知識人とみなされ、小学校の教員も8割が殺されるか強制労働で命を落としました。また焚書政策によってカンボジアの書物の大半が失われました。これによりカンボジアの教育システムは崩壊し、今もなおその傷跡は深く残っています。

内戦が終わり27年、経済発展を遂げている一方で、広がる経済格差が如実です。また、過去の大虐殺などが原因でカンボジアは教育が遅れています。タイやベトナムがものすごいスピードで経済成長を果たしていますが、発展途上の国に位置しています。特にカンボジアは伸び悩む教育の質、貧困、高い非識字率など、挑戦すべき課題は山積みのみです。

◆ カンボジアの初等中等教育

初等中等教育は日本と同じく6-3-3制で、最初の9年が義務教育となっています。小学校（初等教育：6～11歳（第1～6学年））の就学率は約77%ですが、中学校（前期中等教育：12～14歳（第7～9学年））の就学率は約42%となっています。高校（後期中等教育：15～17歳（第10～12学年））の就学率は約20%です。大学（高等教育）への就学率に関する統計値はありませんが、0.7～1.0%程度と推測されています。また、社会人になってからMBA取得のために大学院に通う人がここ数年増えてきているようです（2015年12月現在）。識字率は年代によって異なります。クメール・ルージュ時代に教育が禁止されていたため、45歳以上では20%程度と低いものの、若者の識字率（15～24歳）は2009年の世界銀行調査で女性が85.8%、男性が88.36%です。都市部に住む若い世代の識字率は90%を超えます。国全体の識字率は09年で73.9%。海外からの様々な支援もあり、小学校の数、就学率は増えてきました。ただ、家庭の事情や同地域に中学校、高校がないため、学年を増すごとに就学率は下がっていきます。

カンボジアの公立小学校は、一日三時間のみの授業で先生が来ないこともあります。賄賂などの習慣も残っています。例えば、進級テストを受けるために担任に現金を渡す、テストの点を上積みし優遇してもらうなどの行為が行われています。教科もカンボジア語、算数、社会のみで、体育や美術などはありません。こうした現状にあるため、貧困層の家庭では小学校に行かせる重要性を感じていない傾向が強いようです。中学に進学しても、学べる科目は少なく、特別授業を受講し追加の教科を受けることができますが、それは有料

で、そこで追加授業を受けられる子どもとそうでない子どもには差が付き、中退する子も多いそうです。

◆ 公教育における教員の問題

知識人と教員の多くが虐殺されたため、カンボジアにおいては、熟練の教員、教員免許を持ち教えることを学んだ教員がほとんどいません。教員たちは、手元にある教科書を頼りに授業をするため、子どもたちに本当の学習を授けることが難しい状態です。特に音楽や美術を教えることができる教員はほぼおらず、日本をはじめ、多くの国のNPO団体などが、教員の育成を急ピッチで進めています。

教員の1カ月の給与の平均は、小学校でUS\$22(約2,200円)、中・高校でUS\$23.5(約2,350円)です。家計の1カ月の支出費は、全国平均でUS\$95(約9,500円)、首都プノンペンではUS\$294(約29,400円)であるため、教員の給料だけでは生計を立てることは難しく、副業を持つ教員が多いのです。

プノンペンの小学校では、生徒から毎日100~500リエル(100リエル=約2.5円)を徴収したり、中・高等学校では、正規の授業の他に補習クラスを設けて、授業料を徴収したりすることが常態化しているとの報告もあります。こうした収入と勤務時間の両方において、副業が主で教師業を上回っているのが現状といえます。給料が低いため副業に忙しく、教師が学校に来ない、または、授業改善のための研究や準備にかかる余裕がないのが実情です。

◆ ノンフォーマル教育の必要性

さらに、進級システムも教育の継続を妨げる要因の一つと言えます。カンボジアでは、日本のような出席日数が足りれば成績に関わりなく進級できる制度ではなく、各学年終了時に実施される試験に合格しないと進級できません。進級試験は子どもの学習意欲をそぎ、学校離れを加速させる原因ともなっています。未就学児童や学校に通えない子どもの比率は減少しているとはいえ、一度学校に入学しても、学力不振などから進級試験に合格できずに留年を繰り返し、やがて義務教

育の過程を終了しないまま、学校を中途退学する子どもが多数います。留年は学業成績の維持向上に効果が乏しいだけでなく、留年による就学の長期化は、親や教育行政当局にとっても財政負担を増大させます。

教育を与えることは本来、政府や国の義務です。しかし、カンボジアではその政府が義務を果たせずにいます。義務教育の費用を負担できないといった、学校教育も満足に行えない政府が、学校教育を受けられない子どもたちを支援するのは難しいのです。学校に通えない子どもたちには、NGOや民間による公立学校以外での教育=ノンフォーマル教育が重要な意味を持ちます。

教育を受けることは選択の幅を広げることです。読み書きができることでよりよい仕事に就ける可能性が広がります。また知識を得ることで、病気、HIV、麻薬、売春、人身売買、暴力などの危険から自分だけでなく、家族や他人を守ることもできます。学校に通えない子どもたちに教育の機会を与え、危険から回避・予防する能力を養う、ノンフォーマル教育の意義はそこにあります。

◆ ひろしまハウス

ひろしまハウスは、プノンペンのノンフォーマル教育施設の中でも、取り組みが熱心でユニークなため、「最後のとりで」「最後の教育の場」とも言われています。私とひろしまハウスとの出会いは、2019年9月にベトナム・ハノイで絵本や紙芝居、食を通して文化交流をするイベントを開催した時です。初めてパスポートを取得し憧れの飛行機に乗ってやって来た、ひろしまハウスの子どもたち3人との出会いでした。3日間一緒に過ごすなかで「ぜひプノンペンの僕たちの学校に来



12歳未満の子どもたちが3グループに分かれ、自ら稼ぐための商品づくりをした。訪問した今年2月のプレゼン風景

てほしい」と誘われ、今回訪問することになりました。

ひろしまハウスは、プノンペン市中心部のウナロム寺院に併設されており、図書室、小さな体育館、教室、給食室を有しています。貧困や家庭の事情で十分な教育を受けられない子どもたちが現在51人学んでいます。広島市民や企業、学校からの寄付などによって開設されて14年です。これまでに延べ300人以上を支えてきました。

ここに来ている子ども達は三つのタイプに分かれています。①両親がおらず親戚の出稼ぎ者と共にカンボジアに移住してきて家計が厳しい、田舎出身の子ども。②両親がおらず祖父母か親戚が育てているので家計が厳しい子ども。③片親もしくは両親がいるが、家計が厳しく学校に行くのがやっとなで将来の為の教育を受けることができない子ども。

◆ ひろしまハウスでの教育

近年カンボジアでは、仕事をする上で必要とされているスキルには会計やWEB技術、そして言語数が大きく影響しています。ひろしまハウス（運営主体：NPO法人ひろしま・カンボジア市民交流会）に来ている子どもや、その保護者は、自分達の苦しい生活の中でも一縷の望みをかけて通っています。そこには、「日本語を勉強して日本に行きたい」「いい職業に就きたい」「英語を勉強してお母さんを助けたい」という強い未来志向があります。全員が自ら希望して施設を訪れ、入所を希望しています。

既に入所している子どもが、近所で教育を受けていない子どもを連れて来るケースもあるようです。現在のひろしまハウスは、希望者に対しては、家庭訪問などでこれまでの就学状況や家庭環境を見て、入学させるかどうかを判断しているとのことでした。



右からスレイオウン校長、ソポアン先生、アックナー先生



人懐っこい表情の子どもたち

一度も学校に行っていない子どもに対しては、入学、転入手続きも含めひろしまハウスが申請手続きなどを支援し、公立学校に行かせるよう働きかけています。子どもたちに小中学校の卒業証書を取らせることが、将来に向けて大切だからです。その上で、公立の小学校で補えないことを中心に教育を提供します。午前と午後それぞれ3時間ずつ授業があり、お昼には無償で給食も支給されます。日本語、英語、算数の他に国際交流、職業体験、理科、サッカーや水泳などの体育を学ばせています。さらに、掃除や挨拶などのしつけなどにも力を入れています。

◆ ひろしまハウスの運営

施設を運営するためには1カ月に25万円がかかります。ひろしまハウス現地代表の友廣さん以外の人件費と給食費や設備費がその主なものです。1日約2,000円で25人分の給食を作っています。この施設がなくなれば子どもたちは元の生活に戻り、貧しい生活環境から抜け出すことは極めて難しくなります。お金がないから学校に行けなかった、家庭環境のせいで学校に行けなかった子どもが、自分の意志で勉強をしたいとひろしまハウスに来ています。その彼らの可能性を輝かせる場所としてひろしまハウスを存続させたいと考え、支援金を募っています。

現在の支援金の使途は、運営資金と教育レベルの向上（質の高い教員の採用）、施設内の改装費、子どもたちへの食事提供です。

現在、常勤の教員は3人（カンボジア人で、大学卒業資格者）、アルバイトの大学生1人、ボランティアで運営と広報を担当する日本人、給食職員1人です。

コラム

ゼネラルマネージャー友廣壮希さんに聞く

プロサッカー選手として地域貢献をしなくてはならないという想いになったのは、カンボジアで所属した2チーム目のカンボジアンタイガーFC所属の頃でした。地域貢献、CSRに熱心なチームで活動するなかで、それがプロとして当然だと思いました。

ひろしまハウスの建物は10年前からあり、以前の管理団体が運営していたころから財政的には厳しく寺に譲渡する話があると聞いていました。自費でサッカーボールや文具などを購入し、寄付するようになりました。こうした活動を知ったひろしまハウスの本部と直接コンタクトを取り合うようになり、広島在住の会長から直々にひろしまハウス運営を私に依頼したいと言われました。当時のひろしまハウスは、日本との連携がうまく取れておらず、潰れそうでした。自身が広島県出身ということもあり、故郷への恩返しとして、2017年2月にひろしまハウスの現地責任者となりました。カンボジアの将来を担う子どもたちを支援し続けるためには、基金が必要だと感じ、17年7月に「ひろしまハウス カンボジアの学校の存続をかけたプロジェクト」と銘打ったクラウドファンディングをスタートしました。137人の方たちから尊い1,854,000円（目標1,500,000円）をいただきました。プロサッカー選手とゼネラルマネージャーを両立させて「ひろしまハウス」の運営に携わっています。



友廣 壮希 (ともひろ まさき)

ひろしまハウス現地代表

1991年広島市出身28歳。駒澤大学卒業後、カンボジアでプロサッカー選手として活動。現在7シーズンに入り、4チーム目のNational Police F.C所属。

◆ ひろしまハウスの今後と自分の関わり方

子どもたちの中学卒業後の進路は、現時点では選択制にしています。例えば、日本語学校、高校、専門学校への進学があります。在籍している子どもの中には、中学校で学年トップの成績の子どもも現れました。こうした優秀な子どもに対しては、奨学金の形で大学まで支援していけないだろうか検討しています。学生時代はボランティア教員としてひろしまハウスで働くなどの形でハウスにお礼ができれば、最高の貢献ではないでしょうか。

カンボジアでは学校の卒業証書がなよりの身分証明となり、就職活動などその後の人生に大きく関わってきます。普通の生活を送るためには、なんとしても学校を卒業する必要があるため、その支援を今後も続けていくそうです。高校を卒業した後は、大学受験や日本での就業研修など、その子の希望に合わせた選択肢を提供できるようにしていくとのこと。

生きるためには稼ぐことが必要です。そのためには技術の取得と、マーケットとつながること、そして語学を道具として使えることが必須です。若い日本人、カンボジア人が試行錯誤して運営しているこの学びの場を維持していかなくてはなりません。子どもたちの未来を拓くためには「新たな教育の場」である、ひろしまハウスに覚悟を持って関わっていかねばならないと考えています。北海道の学生や企業とつながるような仕組みを各方面と相談の上進めていきたいです。

取材後記 ◆ ◆ ◆

ひろしまハウスの活動資金はすべて寄付で賄われており、活動資金の確保に日々大変苦戦しています。会員（特別支援会員・正会員・賛助会員）に加入していただき、継続的な支援をお願いできればと思います。会員には年4回発行の広報誌と年1回の活動報告書・決算報告書が送られます。年会費3,000円〜でクレジットでの決済が可能です。詳しくは「カンボジア・ひろしまハウス」の検索をお願いいたします。寄付も随時受付中です。